

戦後75年

世代を超えて伝える

戦争の現実と平和の大切さ

今年には終戦から75年の節目の年です。県内では戦後生まれの人の割合が8割を超え、戦争を実体験として語り継いでいくことが年々難しくなっています。戦争の実態を学ぶことはできません。私たち一人ひとりが、二度と戦争を起こさないという先人の思いを継ぐことが大切です。

小学校3年生時に終戦を迎えた伊勢市在住の辻村修一さんに当時の体験や社会のようすなどについてお話をいただきました。

自由がない戦時中の暮らし

戦時中と現在の暮らしを比べた時の一番の違いは、今は自由に物が買えるということです。当時は戦争を遂行するために、国が人を動員し、また、食料や物資などを管理する体制でした。お米をはじめ、医薬品、魚介類、青果物、木炭、衣料品など、生活に必要なすべてのものが配給の対象でした。配給といっても無料でなく、お金と政府から配られる切符が必要で、国が決めた数量分の物資しか買えない時代でした。



〈伊勢市提供〉

昭和20年7月29日の空襲で宇治山田市（現伊勢市）内の約6割が焼失した。

戦争が厳しくなると、徴兵で人ほとんどいなくなると、今でいう中学生や高校生も「学徒動員」で労働力として徴用されるようになりまし。子どもたちまで働かせないと言。仕事ができない状態にあったと言。え。お米の配給も、不足分が麦から大豆のカスやとうもろこしに変わっていきま。昭和20年8月15日の終戦まで、口にしているものがないということはなく、我慢すれば何とかあったという生活でしたが、自由はありませんでした。

火の海に包まれたまちと復興

私が住んでいた宇治山田市（現伊勢市）では、合計7回の空襲があり、昭和20年7月29日の7回目の空襲が、一番大きな被害となりました。その日、自宅の防空壕から2キロ先の宮川の河川敷まで逃げたのですが、堤防の上って振り返ると、まちが火の海になっていたのが見えました。落ちて来る焼夷弾や火から逃げ途中すごく熱かったこと、河川敷は逃げてきた人でいっぱいだったことを今でも覚えています。

親を失った人の比ではありませんが、空襲の後、一番苦しかったのは、家が焼けて何もかもなくなったことです。家が残った人は履き古した下駄や、古い物にしる、着る服もありません。家を焼かれた人には何にも残っていません。終戦まもなくは配給の体制も整っていませんでしたので、食べていくことも大変だったと思います。食生活も、文房具など、生活に必要なものが何もない状態は、子どもながらに不安でした。

昭和23年には配給の統制も順次解除され、徐々に自由に物が買えるようになりま。また、まちの復興



〈伊勢市提供〉

昭和23年開催の「平和博覧会」。戦後初の博覧会は、約55万人の出入で賑わった。

戦争を知らない皆さんへ
戦争を知らない世代の人たちに伝えたいのは、戦争を二度と起こさないために、戦争の実態を正しく知ってほしいということです。
なぜ知る必要があるか。それは、人は物事を判断する時、自分の記憶や心に残っていることを頼りに判断を下すからです。戦時中は情報が操作されていて、後から考えれば理屈に合わないことにも、言われたとおりに取り組む風潮がありました。正しい情報を伝える、得ることの大切さを知るとともに、歴史的な事実を自分の中に蓄積させておくことで、物事を判断する時、ごまかさず、きちんとして判断ができると思います。そのためにも、歴史的な事例に普段から触れる機会を増やしてほしいです。
8月は、戦争を知る催しがいっぱいなので開催されています。ぜひ出かけてみてください。

辻村 修一さん
(伊勢市)

昭和12年生まれ。中学・高校教員を経て伊勢高等学校で校長に就任。伊勢市史の編さんにも携わる。現在は「山田奉行所記念館」の運営委員長を務める。



県では、平和の尊さや大切さを県民の皆さん、特に未来を担う若い世代に伝える機会づくりに取り組んでいます。

平和に関するパネル展

期間 8月4日(火)～16日(日) ※8月11日(火)は休館日

場所 県総合博物館(MieMu) 3階 学習交流スペース ほか



県内の戦争遺品や広島平和記念資料館から借用した「写真パネル」を展示します。

※県総合博物館の所蔵品は、「戦争と三重～子どもたちが見た戦争～」として、8月30日(日)まで3階企画展示室で展示中です。

平和啓発資料の貸し出し (対象：学校・団体・市町)

県が保有する平和啓発資料などの展示や、学校への貸し出しなどを行い、啓発活動を進めています。詳細は県ホームページをご覧ください。



戦争体験朗読 CD ▶



三重県 平和啓発 貸出 Q検索

ホームページでは、戦争体験者インタビューがご視聴いただけます。